

フラ・アンジェリコ作サン・マルコ修道院僧房《受胎告知》  
における「受肉」と「光」の問題  
——形象不可能性をめぐって

杉山太郎

はじめに

本稿では、フラ・アンジェリコがサン・マルコ修道院の第三僧房に描いた《受胎告知》(1440年頃、フレスコ、176×148cm、フィレンツェ、サン・マルコ美術館、第三僧房)上の白い光に即して、キリスト教における不可視性と形象化の問題を検討する。「受胎告知」は、新約聖書に基づく物語主題であると同時に、神性の受肉という不可視の神秘とかかわる。受肉や神性原理は形象不可能性の領域に位置し得る。しかし、それに抗うようにして、イメージは形象化の可能性を持つということ、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンは主張する。本稿は、ユベルマンの研究『イメージの前で』(1990)<sup>(1)</sup>に端を発し、筆者の観点からその説を補うものである。受肉の問題に立ち入る際には、福音書の記述だけでなく、受肉をめぐる言説を踏まえる必要がある。そこで本稿では、フラ・アンジェリコと同じくドミニコ会士であり、後世のキリスト教世界に深く影響を与えたトマス・アキナスに焦点を当て、その受肉論を『神学大全』第三部に基いて整理する。また、筆者は、今作で輝く白い光を受肉と関連付けるが、その論拠として、光にまつわる言説の重層性を提示したい。今作の光表象は、重層的、多義的であるという点で、受肉と結びつくのではないだろうか。以下、本稿は、ユベルマンから出発し、受肉と光の関係を浮き彫りにすることで、彼の議論を補足することを目的とする。

## 1. ジョルジュ・デイデイ = ユベルマンによる 美術史の方法論への批判的提起

15世紀の「受胎告知」図は装飾的要素が多く、マリアの処女性を示す百合やガラス瓶といったモチーフが描かれるのが一般的である。サン・マルコ修道院の改修工事の開始は1437年であるが、ほぼ時を同じくして、1435年に、L・B・アルベルティは『絵画論』のラテン語版を書いており、その中では、イストリアに必要なものは多様性であると述べられている<sup>(2)</sup>。それに反するように、今作では意図的に装飾性が削ぎ落されている。ガブリエル、マリア、聖ペトルスらの人物と、マリアの指に挟まれた聖書や足元の木製スツールを除けば、画面上に語り得る要素は一見無いように思われるが、画面の奥、ガブリエルとマリアの間に溢れる白い光を無視することはできない。

今作の白い光に対しては、自然主義的表現というウィリアム・フッドによる見解<sup>(3)</sup>や、神性の光と象徴的に解釈する可能性を示唆する遠山公一による指摘<sup>(4)</sup>、など様々な立場が先行研究において見られる。一方で、ユベルマンは、この白の物質性を強調する。今作では、白の顔料が輝いている。彼によれば、受肉という表象不可能な神秘が、フレスコの表面の物質に「受肉し」、白として現前化した<sup>(5)</sup>。「受肉された」白の次元では、聖書から中世の神学体系の中で重層的に示されてきた神性原理が潜在しているのである。

ここで、今作をユベルマンがいかなる文脈で持ち出しているのかに触れておきたい。『イメージの前で』は、美術史の方法論に対する批判的検証を行っている。従来の美術史学は、イメージに対して三つの範疇、「見えるもの」「読めるもの」「見えないもの」しか有してこなかったとユベルマンは指摘する<sup>(6)</sup>。「見えるもの」とは図像や人物、「読めるもの」とはなんらかのテキストに基づく内容、そして、「見えないもの」とは、字義通り絵画の中に「何もない」とされるものであり、今作の白は、美術史にとってまさしく「見えない」。パノフスキーのイコノロジー論は、これらの範疇の枠内のみにある点において批判される<sup>(7)</sup>。

加えて、彼が主張するのは、実証主義的手法の限界と、美術史におけるアナクロニ

フラ・アンジェリコ作サン・マルコ修道院僧房《受胎告知》における「受肉」と「光」の問題  
ズムである<sup>(8)</sup>。《受胎告知》を含めて、サン・マルコ修道院のフレスコ画は、クワトロ  
ロチェントの絵画伝統に類型化できるものではない。なぜなら、サン・マルコの作品  
は中世の神学体系と密接に結びついており、同時期の他作例と同列に分析することには  
限界があるためである。この点から、バクサンドールによる同時代的手法も批判的  
となっている<sup>(9)</sup>。よって、美術史は、アナクロニズムを退けるのではなく、利用  
しなくてはならないとユベルマンは言う<sup>(10)</sup>。

従来の方法論の問題点を示したユベルマンは、バタイユから取り入れた「非-知  
(non-savoir)」の概念を導入し、美術史が扱う範囲内での知の対象に終始するのではな  
く、不可知のものを捉えようとする知の実践を主張する<sup>(11)</sup>。すなわち、中世の神学  
体系の神秘への挑戦は、非-知の働きであり、イメージにおいては、通常見逃される  
不定形なもの、例えば、今作の白は非-知とされ、それは三つの範疇から区別されて「視  
覚的なもの」と名付けられる<sup>(12)</sup>。また、彼は、こうした「視覚的な」イメージに、「徴  
候(症状)(symptôme)」という語を付与する<sup>(13)</sup>。徴候(症状)は、対象に対応する一  
義的な意味に還元されるものではなく、多義的な意味の連鎖から現れるものと説明さ  
れる<sup>(14)</sup>。こうして、ユベルマンは、伝統的な図像コードの外にある今作の白い光を、  
新たなイメージ研究の例示として導入した。

しかし、ユベルマンによる議論には、不足する観点もあるのではないだろうか。彼  
は、今作の白を、神秘が潜在する物質として扱うと同時に、それはドミニコ会修道士  
が身に纏う衣服の色だと述べる<sup>(15)</sup>。前者の論点には同意できるが、白で以てドミニ  
コ会の衣服を想起させる部分には、やや過剰な関連付けの傾向が否めない。なにより、  
ユベルマンは、白について語っていても、光をほとんど対象化していない。今作の白  
は、白色顔料であるのみならず、光として描かれた白である。そうならば、受肉との  
関わりの中で、なぜ白い光が立ち現れてくるのかを思想的にも追求すべきであり、本  
稿では後程、光の言説に触れる形でこの点に立ち入りたい。

## 2. トマス・アクィナス『神学大全』の受肉論

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」<sup>(16)</sup> という記述は、神の受肉を端的に言い表しているが、その適当性が重大な神学的問題となった。受肉については中世を通して論じられ、幾多の「受胎告知」作例も造形化されたが、とりわけ、共にドミニコ会士であった、トマスの受肉論とフラ・アンジェリコの「受胎告知」図には密接な繋がりがあり、同時に語られるべきである<sup>(17)</sup>。

トマスは、『神学大全』第三部第一問題において、受肉の適合性、目的、時間性をめぐる議論を展開する。ここでは、永遠で絶対的な神がなぜ現象界に受肉する必要があるのか、という異論に対してのトマスの回答が見られる。第一に、受肉の本質は、神の性質が変化するものではなく、被造物たる人間の側を神に合一させたものとされる<sup>(18)</sup>。次に、受肉の目的とは、墮落した人類の救済であると語られる。神は無限の力を有しているのだから、受肉せずとも救済は可能ではないのかという異論を、トマスは、人類とのかかわりの中で反駁する<sup>(19)</sup>。すなわち、受肉によって人類により近づいたイエスという形で神を礼拝することで、我々は神を一層知ることに繋がるのである<sup>(20)</sup>。そして、受肉が歴史に内在する事実であるならば、その時間性も問われる。受肉が人類の歴史の途上で生じたのは神の計らいゆえだとトマスは述べており、受肉は過去と未来の人間にも救済の力を波及させているのである<sup>(21)</sup>。つまり、受肉は一時的な現象ではない。それは、時間的継続性を有する、人類全体の救済プログラムなのである。

トマスは、神の超越性を損なうことはしていない。彼は、人類にとって最も適当な方法として神の意志で選ばれたものが受肉であるということを、一貫して語っている。トマスの議論と同様に、フラ・アンジェリコの受肉への態度も慎重であった。この画家は、幼児キリストの姿を用いるだとか、なんらかのモチーフを受肉の象徴かのように描くことはしなかった。以上のように、受肉の時間性、及び、受肉が神秘の現象としてのみならず、神学的省察の対象としての命題である点から、その表象不可能性は理解されるだろう。受肉は、神学的な意味の重層性を孕んでいるために、具象的な対象で以て一義的な対応関係のイメージを付与させることはできない。だが、第三僧房

フラ・アンジェリコ作サン・マルコ修道院僧房《受胎告知》における「受肉」と「光」の問題の《受胎告知》の光は、曖昧性をもつ点で、受肉の多義性を内包しているのではないか。それでは、フラ・アンジェリコの光の捉え方を検討したい。

### 3. 光と形象について ——類似と非類似の観点から

#### 3-1. 偽ディオニュシオスの思想とその受容

光の言説はメタファーの領域から形而上学的使用に至るまで豊富な蓄積があり、光の思想を対象とした先行研究も多いが、ここでは、偽ディオニュシオス・アレオパギタの『神名論』と『天上位階論』での形象論を取り上げる。これらは、5世紀以降に成立したとされる『ディオニュシオス文書』という著作群に属しており、新プラトン主義をキリスト教思想に流入させた。15世紀前半のフィレンツェにおいて、フラ・アンジェリコは、ディオニュシオスの思想に、直接的、間接的にアクセス可能であった。サン・マルコ修道院に付設された図書館の蔵書目録によると、ディオニュシオスの著作のラテン語訳が所蔵されていたことがわかる<sup>(22)</sup>。また、トマスはディオニュシオスの注解書を執筆しており、『神学大全』の中でも各著作から頻繁に引用がなされている。サン・マルコ修道院には、ディオニュシオスの肖像（1438-1450年頃、フレスコ、フィレンツェ、サン・マルコ修道院参事会室）も描かれている<sup>(23)</sup>。こうしたディオニュシオスと画家の関連についてはユベルマンも指摘している<sup>(24)</sup>が、本稿では思想的な受容の面を改めて考察したい。

ディオニュシオスは、光という語を多用する<sup>(25)</sup>。ディオニュシオスが神について考察する際、神の光はそれ自体として神性原理と結びつけられている。しかし、光は神を形象し得るかという問題では、ディオニュシオスが両義的な議論を展開していることに着目したい。『天上位階論』において、我々は神性の根源を光と表現することがある一方で、いかなる光も神性の類似には及ばないとディオニュシオスは言う<sup>(26)</sup>。『神名論』によると、神はロゴスを超えたロゴスであり、超存在的存在とされる<sup>(27)</sup>。同様に、根源的な神性の光は、光を超えた光であり、我々の把握不可能なところに位置しているのである<sup>(28)</sup>。ここで、ディオニュシオスは非類似性を提唱する。神は「何

フラ・アンジェリコ作サン・マルコ修道院僧房《受胎告知》における「受肉」と「光」の問題にも似ていない」のだから、神との類似においては、逆説的に非類似的な形象が相応しい<sup>(29)</sup>。『天上位階論』にある通り、聖なる事柄の形象には二種類あり、第一は、ロゴスや光といった神に類似する概念だが、これらはかえって適当ではなく、第二が、神性とは到底似つかわしくない低級な物質を用いることである<sup>(30)</sup>。ディオニュシオスが質料・物質を擁護していることには注目しなくてはならない。

ユベルマンも、ディオニュシオスの質料と非類似の観点を自身の研究に導入した。彼の指摘では、「受胎告知」図に見られる疑似大理石は、非類似性によって受肉を「潜在」させている<sup>(31)</sup>。フラ・アンジェリコの祭壇画の《受胎告知》(1432年頃、テンペラ・板、154×194 cm、マドリード、プラド美術館)の例を含め、多くの同時代画家が色大理石を描いていることから、神性と物質との非類似的な関係性は確認できるが、第三僧房の《受胎告知》には大理石模様はなく、光があるのみである。大理石模様から光への転換は、修道士の僧房という、私的かつ高度に神学的な場としての空間性に依拠すると本稿は主張する。しかし、いかなる光も神性の類似に相応しくないのならば、この光は何であるのか。そこで次に検討されるべきは、中世修道会における光への姿勢である。

フランチェスコ会は、光の科学的な研究が、分有された神の光の解明に繋がると考えた。彼らの光へのこうした神秘的態度は、階層的な光を上昇的に結びつけている<sup>(32)</sup>。一方、ドミニコ会にとっては、感覚的な光は自然的な対象であり、現象界の光それ自体が神秘を内包するわけではなかった<sup>(33)</sup>。トマスも『神学大全』の中で光という語で度々記述をするが、第一部で示されるように、我々は、光を媒介として神の本質を観るのではない<sup>(34)</sup>。すなわち、光という点では、トマスはディオニュシオスに否定的だとわかる。神の形相を被造物が理解するには、知性の光の高まり、知性の照明が必要なのである<sup>(35)</sup>。

### 3-2. フラ・アンジェリコによる光の表象

こうした光の言説の系譜を受けて、フラ・アンジェリコは絵画で光をいかに扱ったのか。サン・マルコ修道院二階東側の説諭修道士のための個室の絵画群<sup>(36)</sup>では、白い光は四つの僧房に描かれている。《受胎告知》、《主イエスの変容》(1440-42年頃、

フラ・アンジェリコ作サン・マルコ修道院僧房《受胎告知》における「受肉」と「光」の問題  
フレスコ、181 × 152 cm、フィレンツェ、サン・マルコ美術館、第6僧房)、《キリストの復活》  
(1440-42年頃、フレスコ、181 × 151 cm、同、第8僧房)、《聖母戴冠》(1440-42年頃、フレス  
コ、171 × 175 cm、同、第9僧房)である。《主イエスの変容》の光は、巨大なマンデル  
ラとして、福音書の記述<sup>(37)</sup>を端的に表す。《キリストの復活》《聖母戴冠》の光は、  
福音書に直接依拠するものではないが、新約聖書で繰り返される、神、ロゴス、光の  
結びつきをメタファー的に示唆している。《聖母戴冠》の光は、マリアの威光を示し、  
彼女を包み込んでいる。また、《キリストの復活》のように、画家は光線的で発出的  
な光を描くことも可能であった。

にもかかわらず、《受胎告知》の光は不定形である。その曖昧さに、このドミニコ  
会修道士の画家の光への慎重さが見て取れる。すなわち、他の三つの主題の光は、新  
約聖書に基づくメタファーの次元で捉えられ、「物語」的な枠組みの中に位置づけら  
れている一方で、《受胎告知》の白は輪郭がぼやけており、この主題を「非・物語」  
的にしている。フラ・アンジェリコはドミニコ会士であり、フランチェスコ会のように  
自然の光に過剰な意味づけを行っているとは考えにくい。ディオニュシオスが言う  
通り、光は神との類似において相応しい形象ではなかった。また、トマスによれば、  
感覚や表象の力で神を見ることは不可能なため、神の恩寵の光、根源的光明が、イメ  
ージとして現前化することはあり得ない。それは、先述のように、知性の強化によっ  
てのみ近づくことができるものであった。ゆえに、総合すると、この光は、なんらかの  
メタファーや表象ではなく、光の言説の重層性を内包しており、一義的な決定の不可  
可能性を読み取る必要があると筆者は考える。受肉は多義的な意味の重なりであり、そ  
のために、直接的で一義的な形象ではなく、今作の光のような曖昧性がもたらされた  
のではないだろうか。換言すれば、「画家として」技法を用いて事物を表現しようと  
する欲求と、「修道士として」神秘の具象化を逡巡する間での、フラ・アンジェリコ  
の葛藤をその曖昧性の中に認めるべきである。したがって、受肉と光をめぐって中世  
を通して蓄積された言説を踏まえると、意味の重層性という観点から、受肉と不定形  
の光表象は結びつくのである。

## 結びに代えて

以上、受肉の重層性の確認及び、光の言説の構造的な分析によって、ユベルマンの議論を光表象においてわずかながらでも発展させることができたのではないかと思われる。想像不可能性や形象不可能性を断言するのは容易である。受肉は、たしかにそうした不可能性を持つが、イメージは、不可能と断じられ得る領域で表象に挑戦する<sup>(38)</sup>。フラ・アンジェリコが第三僧房の《受胎告知》で描いた光は、具象的な光線でも、抽象性という語彙に安易に還元されるような単なる白の色面として捉えられるものでもない。すなわち、なにものにも似ていない神性の受肉を絵画に潜在させるために、光としての白は、不定形で曖昧に現前した。重層性の類似という意味において受肉と光は関連し、そこで、形象不可能性に対抗するイメージの形象の可能性が切り開かれるのである。

### 註

- (1) Didi-Huberman, Georges, *Devant l'image. Question posée aux fins d'une histoire de l'art*, Paris, Minuit, 1990a. ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージの前で 美術史の目的への問い』江澤健一郎訳、増補改訂版、法政大学出版局、2018年。
- (2) L・B・アルベルティ『絵画論』改訂新版、三輪福松訳、中央公論美術出版社、2011年、48頁。
- (3) Hood, William, *Fra Angelico at San Marco*, New Haven, Yale University Press, 1993, p. 235.
- (4) Toyama, Koichi, "Note of Fra Angelico's Rendering of Light and Shadow", *CARLS series of advanced study of logic and sensibility*, Vol. 2, 2008, p. 339.
- (5) Huberman 1990a, *op. cit.*, p. 33. 前掲書、35頁。
- (6) *Ibid.*, p. 25. 同上、22-23頁。
- (7) *Ibid.*, pp. 16-17, 145-153. 同上、13-14、201-212頁。
- (8) アナクロニズムについては、次の著作で詳細に論じられている。Didi-Huberman, Georges, *Devant le temps. Histoire de l'art et anachronisme des images*, Paris, Minuit, 2000. ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『時間の前で 美術史とイメージのアナクロニズム』小野康男・三小田祥久訳、法政大学出版局、2012年。
- (9) Huberman 1990a, *op. cit.*, pp. 52-53. 前掲書、62-63頁。

- (10) *Ibid.*, p. 53. 同上、64 頁。
- (11) *Ibid.*, pp. 25, 29-31. 同上、23、28-31 頁。
- (12) *Ibid.*, pp. 26-27. 同上、25 頁。
- (13) *Ibid.*, p. 28. 同上、27 頁。
- (14) ユベルマンは、ヴァールブルク論の中で、多義性を排除し、事実のみを対象とする強い記号としての指標 - 身体的特徴に基づく症候学的モデルと、客観的事実に還元不可能で、意味作用の脆い弱い記号としての指標 - 症状の思考に基づく症状的モデルの、二つの認識論的モデルを提示し、美術史上後者が無効化されてきたことを、パノフスキーやカルロ・ギンズブルグを引き合いに出して批判している。Didi-Huberman, Georges, “Pour une anthropologie des singularités formelles. Remarque sur l’invention warburgienne”, *Genèses*, No. 24, Trajectories, Sept. 1996, pp. 145-163. ジョルジュ・デイディ = ユベルマン「形式的特異性の人類学のために ——ヴァールブルクの発想に関する考察——」三宅真紀・赤間啓之訳、展覧会カタログ『記憶された身体 ——アビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫』国立西洋美術館、1999 年、237-245 頁。
- (15) Huberman 1990a, *op. cit.*, pp. 35-36. 前掲書、38 頁。及び Didi-Huberman, Georges, *Fra Angelico. Dissemblance et figuration*, Paris, Flammarion, 1990b, p. 238. ジョルジュ・デイディ = ユベルマン『フラ・アンジェリコ 神秘神学と絵画表現』寺田光徳・平岡洋子訳、平凡社、2001 年、276 頁。
- (16) 『ヨハネによる福音書』1:14.
- (17) フラ・アンジェリコは、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院などでトマスの図像に触れ、その後の修道生活で神学的素養を深めたと考えられる。画家の活動初期については、Damigella, Giuseppe M., *Fra Angelico: Pittore-Teologo del Vangelo*, Napoli, Editrice domenicana italiana, 2011, pp. 28-29.
- (18) S.T. III, q.1, a.1 トマス・アキナス『神学大全』第 25 卷、山田晶訳、創文社、1997 年、6 頁。
- (19) S.T. III, q.1, a.2 同上、15 頁。
- (20) S.T. III, q.1, a.2 同上、19 頁。
- (21) S.T. III, q.1, a.6 同上、57 頁。
- (22) Ullman, Berthod L. and Philip A. Stadter, *The public library of Renaissance Florence: Niccolò Niccoli, Cosimo de’Medici and the library of San Marco*, Padova, Antenore, 1972, pp. 134-135.
- (23) Hood, *op. cit.*, pp. 188-189.
- (24) Huberman 1990b, *op. cit.*, pp. 55-61. 前掲書、73-83 頁。
- (25) デイオニュシオスの光形象については以下を参照。熊田陽一郎『美と光 西洋思想史における光の考察』国文社、1986 年。
- (26) CH, 2, 3, 140C-D『天上位階論』今義博訳、上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想

- フラ・アンジェリコ作サン・マルコ修道院僧房《受胎告知》における「受肉」と「光」の問題
- 原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』平凡社、1994年、360頁。
- (27) DN, 1, 1, 588B『神名論』熊田陽一郎訳、『ギリシア教父の神秘主義』谷隆一郎・熊田陽一郎訳、教文館、1992年、140頁。
- (28) DN, 1, 4, 593A 同上、145頁。
- (29) CH, 2, 3, 141A 前掲書『天上位階論』、360頁。
- (30) CH, 2, 4, 144B-144C 同上、362-363頁。
- (31) Huberman 1990b, *op. cit.*, pp. 71-81. 前掲書、97-101頁。
- (32) Lindberg, David C., *The beginning of Western science: the European scientific tradition in philosophical, religious, and institutional context, 600 B.C. to A.D. 1450*, Chicago, University of Chicago Press, 1992, pp. 237, 313.
- (33) 両修道会のディオニュシオス受容の違いは、Roger French and Andrew Cunningham, *Before Science: the invention of Friar's natural philosophy*, Aldersgot, Hants, Scolar Press, 1996, pp. 218-224.
- (34) S.T. I , q.12, a.5 トマス・アクィナス『神学大全』第1巻、高田三郎訳、創文社、1960年、227頁。
- (35) S.T. I , q.12, a.2 同上、215頁。
- (36) 二階僧房の機能と装飾プログラムについては以下を参照。Hood, William, "Saint Dominic's Manner of Praying: Gestures in Fra Angelico's Cell Frescoes at S. Marco" , *The Art Bulletin*, Vol. 68, No. 2, 1986, pp. 195-206. 及び、喜多村明里「フラ・アンジェリコ作聖マルコ修道院ドルミトリオのフレスコ装飾 信仰と絵画表現をめぐる一考察」『美学』47巻1号、1996年、37-48頁。
- (37) 『マタイによる福音書』17:1-8 『マルコによる福音書』9:2-8 『ルカによる福音書』9:28-36.
- (38) ユベルマンは、次の著作をはじめ、表象不可能性や想像不可能性をめぐる議論を展開している。Didi-Huberman, Georges, *Images malgré tout*, Paris, Minuit, 2003. ジョルジュ・ディデイ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお——アウシュビッツからもぎ取られた四枚の写真』橋本一径訳、平凡社、2006年。